令和5年度　家庭部会研究計画

１　研　究　主　題

自らよりよい生活を創り出そうとする子供の育成

－学びの質を高める家庭科の学習の実現に向けて－

２　研究主題設定の理由

近年，グローバル化の進展や急激に進む少子高齢化，絶え間ない技術革新等により，社会構造は大きく急速に変化し，予測が困難な時代となっている。加速度的に変化する社会において，子供たちには，社会の急激な変化に主体的に対応する力を身に付けることや，持続可能な社会の担い手と幸福な人生の創り手となることが期待される。学校教育においては，子供たちが，学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解するとともに，変化に対応し，新たな価値を創造できる力を身に付け，生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするために，学びの質を一層高める授業改善を進めていくことが必要である。さらに，令和３年中央教育審議会答申で示されている，「令和の日本型学校教育」の構築を目指した，「全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現」に向けた取組が求められている。

こうした中，家庭科では，生活の営みに係る見方・考え方を働かせ，衣食住などに関する実践的・体験的な学習活動を通して，家族や家庭生活，衣食住の生活，消費生活や環境などについての科学的な理解を図り，それらに係る技能を身に付けることや，日常生活から問題を見いだして課題を設定し，様々な解決方法を考え，実践を評価・改善し，考えたことを表現するなど，課題を解決する力，よりよい生活の実現に向けて生活を工夫し創造しようとする態度等を育成することを目指している。

このように，家庭科で身に付けた資質・能力を家庭，地域から最終的に社会へとつなげ，社会を生き抜く力としていくことが大切であると考え，研究主題を「自らよりよい生活を創り出そうとする子供の育成」とし，副主題を「学びの質を高める家庭科の学習の実現に向けて」と設定した。

３　研究主題・副主題について

⑴　「自らよりよい生活を創り出そうとする子供」とは

「自らよりよい生活を創り出そうとする子供」とは，次のような資質・能力を身に付けている子供であると考えた。第一は，家庭科で習得する日常生活に必要な知識が既存の知識や生活経験と結び付けられ，学習内容の本質を深く理解したり，主体的にそれらに係る技能を活用したりする子供のことである。第二は，生活経験を基に日常生活の中から問題を見いだし，課題を設定し，解決方法の検討・計画，実践活動，評価・改善ができる子供のことである。第三は，家族や地域の人々との関わりを考え，家族の一員として主体的に実生活に生かそうとする子供のことである。

自らよりよい生活を創り出そうとすることは，日常生活に特に不便や不十分さを感じることなく過ごしている子供たちにとって容易ではない。そこで，既習の知識及び技能や実物，体験，調査，資料などを活用して，自分の日常生活を改めて見つめることができるようにする。そうすることで，子供たちに「なぜそれをするのか」「なぜそのような方法で行っているのか」という疑問や，「こうしたい」「こうなりたい」という思いや願いが生まれる。そして，子供同士の協働的な学びや，教師や地域の人々との対話を通して問題を見いだし，課題を設定できるようにする。子供たちにとって必然性のある課題を設定することは，学習意欲の高まりや見通しのある学習につながると考える。自分の生活経験と関連付けながら，様々な解決方法を考えたり，実践活動を評価・改善したりする中で，課題を解決する。このような学習を繰り返すことで，生活の営みを大切にしようとする意欲や態度

が育まれ，さらには，生活の営みには家族を支えるという大切な意味があることに気付き，生涯にわたって健康で豊かな生活を送ることができると考える。

⑵ 「学びの質を高める家庭科の学習」とは

学びの質を高める家庭科の学習の実現に向けては，主体的・対話的で深い学びが欠かせない。「主体的な学び」とは，題材を通して見通しをもち，日常生活の課題発見や解決に取り組んだり，基礎的・基本的な知識及び技能の習得に粘り強く取り組んだり，実践を振り返って新たな課題を見付け，主体的に取り組んだりする態度を育む学びである。「対話的な学び」とは，子供同士で協働したり，意見を共有して互いの考えを深めたり，家族や身近な人々などとの対話を通して考えを明確にしたりして，自らの考えを広げ深める学びである。「深い学び」とは，日常生活の中から課題を設定し，その解決に向けて計画，実践，評価・改善といった一連の学習過程の中で，「生活の営みに係る見方・考え方」を働かせながら，自分なりに考え，表現することを通して資質・能力を身に付ける学びである。このような学びが相互に関連し合うことで，学びの質の向上が図られる。さらには，子供たちが将来にわたって，家庭科の「見方・考え方」である，協力・協働，健康・快適・安全，生活文化の継承・創造，持続可能な社会の構築等の視点を，自在に働かせることができるようになり，一人一人に自らよりよい生活を創り出そうとする資質・能力が育まれると考える。

４ 研 究 内 容

⑴ 学びの質を高める指導計画の工夫

① ２学年間を見通した段階的な題材配列

２学年間の学習の見通しをもち，子供や学校，地域の実態に応じて家庭科で育みたい子供の姿を明確にする。学習内容の関連性や系統性を考えて段階的に題材配列を工夫する。Ｂ⑵「調理の基礎」及びＢ⑸「生活を豊かにするための布を用いた製作」については，基礎的・基本的な知識及び技能を確実に定着させるため，２学年にわたって扱うようにする。その際，簡単なものから複雑なものへと次第に発展していくよう配列する。家庭や地域での実践についても学校行事や地域等との関連を考えたり，長期休業等を活用したりするなど，題材の配列に配慮する。「Ａ家族・家庭生活」の⑷「家族・家庭生活についての課題と実践」では，「⑵家庭生活と仕事」又は「⑶家族や地域の人々との関わり」を基礎とし，「Ｂ衣食住の生活」，「Ｃ消費生活・環境」で学習した内容との関連を図り，２学年間で一つ又は二つの課題を設定して年間指導計画に位置付ける。

② 育成する資質・能力を明確にした題材構成

題材構成については，育成する資質・能力を明確にし，その育成を図ることができるように，関連する内容の組み合わせを工夫したり，学習過程との関連を図ったりする必要がある。「Ａ家族・家庭生活」から「Ｃ消費生活・環境」までの各内容項目や指導事項の相互の関連を図ったり，内容ＡからＣまでの各項目で身に付けた「知識及び技能」を活用し，「思考力・判断力・表現力等」を育み，家庭や地域での実践につなげることができるよう一連の学習過程に位置付けたりして，題材を構成する。また，子供たちの課題追究の意識の流れを明確にするために，題材構想図を作成する。そして，その題材における課題を設定し，その解決を通して育成する資質・能力を明確にする。これにより，その題材で子供たちに「何をどのように学ばせるか」「何ができるようになるか」が明確になり，生活をよりよくしようと工夫する資質・能力の育成を図ることができると考える。

③ 家庭・地域との連携を図った教材の開発や人材の活用

子供たちが学習したことを家庭生活で継続して実践できるようにするためには，家庭との連携が大切である。家庭でのインタビューや実践は，家庭における新たな問題発見や，家族の一員として自分が成長していることの自覚を促し，生活を大切にしようとする意欲や態度を育成する。また，家庭科通信や実践カードなどにより，家庭科の学習のねらいや内容について，家庭に情報を提供することが，家庭科の学習の意義について理解を深めることにつながり，家族の協力のもと，効果的に学習を進めることができる。

さらに，幼児又は低学年の児童や高齢者など異なる世代の人々と関わる活動等も考えられることから，教育活動に必要な人的又は物的な支援体制を地域の人々の協力を得ながら整えるなど，地域との連携を図る必要がある。

例えば，生活文化の大切さを伝える活動などにおいては，地域の高齢者をゲストティーチャーとし，生活の工夫について調べたり，教わったりすることが考えられる。特に「A家族・家庭生活」の(4)「家族・家庭生活についての課題と実践」においては，家庭や地域と積極的に連携を図り学習を効果的に進めることができるようにする。

④　他教科等との関連，中学校との系統性の明確化

家庭科と他教科等との関連を明確にするとともに，中学校の技術・家庭科（家庭分野）の内容を見据え，系統的に指導できるよう，教科等横断的な視点で題材配列や題材構成を工夫する。これにより，子供たちがこれまでに学習してきた内容とこれから中学校で学習する内容の関連を意識することで，子供の理解の程度や思考の流れを予想するなど，見通しをもって指導計画を考えることができる。

(2)「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を進めるに当たり，特に「深い学び」の視点に関して，学びの深まりの鍵となるのが「見方・考え方」である。家庭科においては「生活の営みに係る見方・考え方」について，「A家族・家庭生活」の(1)のガイダンスで扱う。例えば，役割や働きについては，各内容の導入で学習するので，「食事の役割」では「健康」，「衣服の主な働き」では「快適」などの視点を働かせることができるように学習を展開する。「課題」は，導入の「とらえる」（問題を見いだす）場面において設定する。例えば，子供の実態から，「１食分の献立を立てよう」の題材では，「健康で元気になるにはどのような食事をとればよいか」という「課題」を設定する。子供たちは，その課題解決のために「生活の営みに係る見方・考え方」である「健康」の視点から日常生活を見つめ，問題を見いだす。その問題を解決するために，個人やグループで課題を設定し，様々な解決方法を考え，計画を立て実践し，その結果を評価・改善し，家庭や地域で実践する。このような一連の学習過程の中で，子供たちは自分の生活経験や学んだ知識（事実的な知識）を関連付けて考え，理解を深めていく。その過程で，本質的な「健康」という概念が習得され質的に高まったり，技能が定着したりする。

①　実践的・体験的な学習活動の充実

題材ごとに，発達段階に応じた基礎的・基本的な知識及び技能を明確にする。子供たちには，試行錯誤する活動や観察，調査，実験等の活動を通して実感を伴って理解できるよう工夫する。また，調理や製作等の手順の根拠について考えることにより，科学的な理解にもつなげる。例えば，みそ汁の調理で「なぜ材料をこの順番で入れるのだろう」ということを，実習を通して理解し，他の材料や料理に応用できるようにしたり，ボタンの付け方で「ボタンと布の間に２～３回糸を巻くのはなぜだろう」と観察して理解できるようにしたりする。このように実践的・体験的な学習活動を通して，確かな知識及び技能の習得を図る。また，製作物の見本，段階見本，試行用の教材，ＩＣＴなどを活用した教材・教具等，子供が活用できるように学習環境を整備する。例えば，学習効果を高めるために，包丁の使い方をタブレット端末で撮影し，繰り返し再現するなどして使い方を振り返り，技能の定着を図る。子供の特性や生活体験を把握し，ティームティーチングや少人数指導を取り入れ学習形態を工夫したり，支援体制を整えたりして，より個に応じた指導の充実を図る。このような学習活動によって，全ての子供たちの可能性を引き出す「個別最適な学び」の実現にもつながると考える。

②　問題解決的な学習過程の工夫

とらえる	見通す	確かめる	振り返る	生かす
生活の課題発見	解決方法の 検討と計画	課題解決に向けた 実践活動	実践活動の 評価・改善	家庭・地域での 実践
既習の知識及び技能や生活経験を基に生活を見つめ，生活の中から問題を見いだし，解決すべき課題を設定する	・生活に関わる知識及び技能を習得し，解決方法を検討する ・解決の見通しをもち計画を立てる	生活に関わる知識及び技能を活用して，調理・製作等の実習や調査，交流活動を行う	・実践した結果を評価する ・結果を発表し，改善策を検討する	改善策を家庭・地域で実践する

上記の学習過程は例示であり，題材ごとに学びの質を高めることができるよう学習過程を設定する。また，２学年間を見通して，このような学習過程を工夫した題材を計画的に配列し，課題を解決する力を養うことが大切である。

③　言語活動の充実

調理や製作等における体験を通して，言語活動を充実させることができるようにする。例えば，課題解決に向けての実践活動では，試行錯誤する活動や実験・実習等を協働して行い，その結果をグループで話し合うことにより，自分の考えと友達の考えの共通点や相違点を見付け，より深く考える。その際，考えを言葉や図表等にまとめ，互いの考えを可視化して比較できるよう工夫したり，実践の結果をまとめて発表したりする際にタブレット端末を活用することが考えられる。また，家庭科で用いる生活に関連の深い様々な言葉が，実感を伴った明確な概念として形作られるように配慮する。このような活動を通して，身近な生活への理解が深まるとともに，学んだことを活用する能力を身に付けることができ，生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度を育むことができる。また，このような「協働的な学び」は同一学年・学級はもとより，異学年間の学びや他の学校，地域との交流においても可能であると考える。子供一人一人のよい点や可能性を生かし，異なる考え方を組み合わせ，よりよい学びが生み出されるようにする。

⑶　学びの意欲が高まる学習評価の工夫

①　資質・能力を育むための「指導と評価の計画」の作成

学習評価は，教師が日々の授業の中で「子供にどういった力が身に付いたか」という学習状況を把握し，指導改善に生かすことや，子供自身が自らの学習を振り返って，さらに課題解決に向け見通しをもち，次の学びへの意欲が高まるようにするために重要である。そこで，子供一人一人に確実に資質・能力を育むことができるよう各題材で育てたい資質・能力を明確にして，学習活動に沿った評価規準や評価方法を明記した「指導と評価の計画」を作成する。

②　評価する時期や場面の精選

日々の授業の中で，子供の学習状況を適宜把握して，指導や支援に生かすことにつなげられるよう評価時期や場面，評価方法等については，「指導と評価の計画」を立てる段階で位置付ける。例えば，同じ内容項目で２回評価を行う場合，１回目を「指導に生かす評価」とし，２回目を「記録に残す評価」とする。評価する時期や場面においては毎回の授業ではなく，内容や時間のまとまりごとに，それぞれの実現状況を把握できる段階で行うなど，その場面を精選し，指導と評価の一体化に向けて取り組んでいく。

③　自己の変容を実感できる評価方法

評価の三つの観点において学習活動に即して，評価場面や評価方法を明確にし，総括的な評価だけでなく，形成的な評価を行う。学習の成果を適切な場面で評価し，子供自身が自己の変容を実感できるようにする。例えば，「知識・技能」では，事実的な知識の習得と概念的な理解をワークシートや作品等から評価する。「思考・判断・表現」では，論述やレポートの作成，調理や製作計画・実践記録表，グループでの話合い等から評価する。「主体的に学習に取り組む態度」では，ノートやレポート等における記述，学習前後の比較ができるようなワークシートやポートフォリオ，行動観察等から評価する。さらに題材全体を通して，育てたい資質・能力が育まれたかを見取るために，「指導と評価の計画」に基づいた１枚もののワークシートを作成する。これにより，子供たちは学習への見通しをもつことができ、学習前後の自己の変容を実感し，次時への課題解決に向けて意欲的に取り組むことができると考える。また，教師は，ワークシートを通して子供が実現している学習の状況を的確に捉えることができ，指導の改善に生かすことができるようにする。

【引用・参考資料】

文部科学省　「小学校学習指導要領（平成 29 年度告示）解説　　家庭編」　　平成 29 年　7 月
文部科学省　国立教育政策研究所　教育課程研究センター
「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料　　令和２年　３月
中央教育審議会　　「令和の日本型学校教育」の構築を目指して　　令和３年　１月
～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現（答申）～